

# S M C 金融・経済マーケットレポート

Reporter Your Financial Brain S M C 豊島 健治

## 金融不信の構図

(何故、血は巡らないか)

今週日曜日の日経新聞は、「不良債権今期処理額 大手行5～6兆円」という見出しで、大手銀行の不良債権処理額が当初計画比3倍程度に膨らむ見通しであることを伝えた。この報道自体はかねてより云われていた予想の範囲内のことで、「まあ、そうだろうな」というように取り立てて驚くものではなかった。

しかし、この「不良債権処理額の増額修正」という銀行の行動は、今まで何度も見せられてきて習性ようになってしまったが、改めて振り返ってみると「驚くべきこと」のように思える。5月決算発表時の次期計画、11月中間決算時の見通し、そして最終決算時の数値が大きくぶれるのは果たして当たり前のことなのだろうか。

人の記憶は曖昧になりがちで、良い意味でも悪い意味でも健忘症は我々人間の特質であるが、銀行の行動はまるで国民の健忘症を当てにしているようにも見える。過去3年間「不良債権処理は峠を超えました」というコメントと共に発表された大手銀行の不良債権処理見込額及び実績額を拾って見ると下表のようになる。

	5月時見込	11月時見込	最終実績
1999年	1.5	2.7	4.5
2000年	1.4	2.3	4.0
2001年	1.8	5.5	?

(単位：兆円、一部推定数値)

この金額推移を見て、貴方は何を思うだろうか。改めて不良債権処理の難しさを思うのは当然として、「銀行の云うことは信用できない」という一国の経済にとって悲しむべきことが定着してしまったと思わざるを得ない。

大手銀行といえば日本を代表する金融プロ集団である。そこが発表する数値が信用できなければ、それ以下の金融機関が公表する数値は「何をか云わんや」ということになる。大手銀行はそれだけの自覚を持っているのだろうか。

業種別株価指数で、バブル崩壊以降の安値を未だに更新し続けているのは銀行株指数だけである。そして銀行株が日本の株価指数のガン化しているが、銀行経営者はその原因が「不信」にあることを自覚しているのだろうか。

別に銀行攻撃をやるという訳ではないが、ついでにもう一つのデータを持ち出してみる。今年8月頃日経新聞に出た数値で、昨年度法的整理となった2,097社の破綻1年前、半年前の銀行の自己査定状況である。

	正常先	要注意先	破綻懸念先	その他
1年前	13%	45%	37%	5%
半年前	9%	32%	46%	13%

これによると法的整理(事実上の倒産)に至った企業では、不良債権に分類される破綻懸念先以上に、不良債権には入らない正常先・要注意先が多いことが判る。銀行は「貸出資産劣化のスピードが想像以上に速い」と説明しているが、多くの人はその説明を納得してはいない。自己査定を銀行の都合に合わせているのではないかと銀行の行為そのものを疑っているのである。

日本経済の血脈を担う銀行がこんな状態では、銀行が銀行である所以が喪失する。

日銀が銀行にお金をジャブジャブに供給し始めて何年になるだろうか。それでも「未だ足りない」という声に押されて8月からは更に供給量を増やし、今では日銀当座預金に9兆円もの巨額資金が滞留している。これは資金の澱みそのものだ。日銀当座は無利息である。無利息の口座に大量のお金が遊んでいるということは、金融機関が資金運用を諦めてしまったということの意味する。信じられないかも知れないがそれが実態だ。「これ以上国債を買うのは怖い。短期運用もゼロ金利。だったらそのまま放っておくか」資金運用担当者はそう考えているに違いない。「未だ足りない」と叫ぶ人達もいるが、問題はお金の量が少ないことではなく、お金が流れないことにある。

何故お金は流れないか。理由は単純だ。銀行等金融機関の金融仲介機能、ひいては信用創造機能が著しく衰えているからだ。何故衰えたかと云えば、不良債権を抱えたままでは利益計画すら見通せないからだ。だから前述のように希望的観測に基づいた処理見込額を発表したり、甘い自己査定を実施し貸倒引当額を削減しようとする。当然新たにリスクを取って貸出を増やそうという意欲など湧いてこない。

早く「不信の構図」から脱却しなければ経済が必要とする血が必要だけ流れない。そして多くの企業が貧血で憤死する恐れがある。